

論文内容の要約

論文名	Clinical Assessment of Delayed Gastric Emptying and Diabetic Complications Using Gastric Emptying Scintigraphy: Involvement of Vascular Disorder 胃排出シンチグラフィを用いた胃排出遅延と糖尿病合併症の臨床的評価:血管障害の関与
氏名	小谷 晃平
<p>【目的】糖尿病では胃排出遅延がしばしば見られる。胃排出遅延が自律神経障害や血糖値変化と関連したという報告は見られるが、糖尿病合併症全般との関連を評価した報告は少ない。そこで本研究では糖尿病患者における胃排出機能と糖尿病合併症全般との関連を検討した。</p> <p>【対象】糖尿病の治療目的にて入院した糖尿病患者 34 例を対象とした。</p> <p>【方法】全例に対し Tc-99m-diethylenetriaminepentaacetic acid(DTPA)を用いた胃排出シンチグラフィを行い、胃全体、胃近位部、胃遠位部のそれぞれの胃排出時間(T1/2)を計測した。T1/2 と糖尿病関連因子や合併症との関連を調べた。</p> <p>【結果】胃全体 T1/2 遅延群では T1/2 正常群よりも自律神経障害を有する者が多かった。頸動脈内膜中膜肥厚度(IMT)と足関節上腕血圧比(ABI)は血管障害のリスク評価因子であるが、胃全体 T1/2 正常群と比べ、T1/2 遅延群では IMT が肥厚しており($p=0.009$)、ABI が低かった($p=0.012$)。胃全体 T1/2 は IMT と正の相関を示し($r=0.391$, $p=0.027$)、ABI と負の相関を示した($r=-0.389$, $p=0.028$)。これらの相関は主に胃近位部で強く見られ、自律神経障害のない患者でも同様の結果であった。糖尿病の治療開始 3-6 ヶ月後に再度シンチグラフィを受けた 9 例のうち 7 例で HbA1c 値が低下し、胃全体 T1/2 が治療前よりも短縮した。</p> <p>【結論】胃全体、特に胃近位部の排出遅延が血管障害のリスク評価因子である IMT や ABI と相関していた。自律神経障害など他の糖尿病関連因子と同様、血管障害が胃排出遅延の病態に関与している可能性が考えられた。また、HbA1c 値の改善が胃全体 T1/2 の短縮と関連しており、長期間の血糖コントロールが胃排出機能を改善することが示唆された。</p>	